

美術の資質・能力を育む授業の工夫

松岡 あすみ

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成23年度から平成25年度の3か年は、「自ら問う力を育む授業の創造」という全体研究主題の基、「生徒が主体的に学習し、美術の基礎的な能力を伸ばす題材の開発～言語活動の充実を通して～」を研究主題として研究・実践を行った。生徒に身に付けさせたい資質や能力と、学習内容のバランスを見極めながら、思考力や判断力、表現力を働かせ、それらの力を培い、これからの生活に生かすことができる美術の学習を身に付けるためにふさわしい題材を考えてきた。その結果、生徒が主体的に考えながら課題に取り組む学習の積み重ねにより、「自ら問う」姿勢を育成できたと考える。

平成26年度から平成28年度の3か年は、『深く考える授業』の創造』という全体研究主題の基、「美術の基礎的な力を伸ばす授業の工夫」を研究主題とし、美術の基礎的な力を伸ばすことを目指し、それまでの取組を継続して題材と指導の工夫に取り組んだ。特に2,3年次には、全体研究において深く考えるための手だてとして掲げられた「視点を変える活動」を取り入れた授業を行った。その結果、表現と鑑賞の学習において、友だちと意見を交流したり、資料を用いることで知識と出会ったりするなどして視点を変えることにより、よりよいものを目指して試行錯誤する生徒の姿が見られるようになってきた。

平成29年度からは、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」と研究主題とし、研究に取り組んでいる。全体研究における3か年研究の1年次にあたる平成29年度には、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目して題材構成や授業の手立ての検討、実践を行った。続く平成30年度には、造形的な見方・考え方を働かせた学びを通して育まれた資質・能力を見取することに主眼を置き、授業構成とワークシートの2点を工夫した授業実践を行い、生徒自身の学習調整を促せるよう研究を重ねてきた。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。インターネットを利用し検索することで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出すことが難しくなっていると感じる。

生活面においては、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりすることが考えられる。

学習活動においては、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取組み方がわかると同様に積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思い描いたことなどを基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸などに表現したりする。鑑賞では、作品から豊かに感じ取り、自分が感じたことを言葉にし、友達と意見を交換することができる。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など美術館を訪れた経験のある生徒も比較的多い。一方で、美術の授業を通して身に付けたい力や目指すところなどを理解し、取り組んでいる生徒は少ないように感じている。そのため、学んだことを日常生活で生かす経験も限られているようである。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、造形的な視点を持ち、生活や社会の中で美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力をさらに伸ばしていきたいと考えている。

(3) 全体研究主題より

①美術科における「見方・考え方」について

新学習指導要領解説において、造形的な見方・考え方について「美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を、造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと」としている。造形的な視点についても、「造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点」だとしている。つまり、造形的な見方とは、形や色彩、イメージなどの造形的な視点で捉えることであり、考え方については、表現することや鑑賞することを通して自分なりの意味や価値をつくり出すことだといえる。

②「見方・考え方」を働かせた学びを通して、美術科で目指す具体的な生徒の姿

身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるように、造形的な視点をもたせたい。また、表現と鑑賞の指導の関連を図る中で、造形的な視点を基にどのような考え方で思考するかを生徒自身が理解し、自覚できるようにしたい。それは、「A 表現」(1)アの事項では、自己の表したいことを重視して発想や構想をするのに対し、イの事項では目的や機能などを踏まえて発想や構想をすることなどである。鑑賞においても、感性や想像力を働かせて見方を広げたり美術文化の特性や良さなどに気づいたりできるようにしたい。そして、進んで他者と関わりながら、意味や価値をつくりだす生徒の育成を目指したい。

③「見方・考え方」を働かせた学びを通して育まれた資質・能力の見取り方

造形的な見方・考え方を働かせた学びを通して、育まれた資質・能力を見取るため、本校美術科では次の2点に着目して工夫を行っている。

まず一つ目は、授業構成の工夫である。授業のねらいを明確に示し、生徒自身がそのねらいについて振り返る機会を毎回設定し、形成的な評価を行う。また、相互鑑賞や題材全体を振り返る機会を設定することで、自らの価値観を再構成するきっかけにしたいと考えている。

二つ目は、ワークシートの工夫である。ねらいに対する振り返りや、活動の中で感じたことを記録できるようにするとともに、前時までの内容や題材全体の記録が見やすいように形式を工夫している。

④教科横断的な視点について

教科横断的な視点として、総合的な学習の時間 (SELF) との関わりについて述べる。本校では「課題設定」「情報収集」「情報選択」「情報分析」「表現」「自己省察」という6つを育成したい力として掲げ、美術科の年間指導計画に記載することとした。また、6つの力を育成する場面について、指導案にも合わせて記載し、教科の学習場面でも育成を意識していく。

(4) 本年度の研究主題

平成28年12月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改定及び必要な方策等について(答申)」が示された。この中で、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、その枠組みを改善したとしている。そのポイントが、以下の6点である。

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科間・学校間段階のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

今回の改定ではさらに、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を以下の三つの柱に整理している。

ア「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」

イ「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」

ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

美術科の目標についても、美術科において育成を目指す資質・能力をより明確にするため（１）「知識及び技能」、（２）「思考力、判断力、表現力等」、（３）「学びに向かう力、人間性等」に整理して示されている。具体的には、（１）は、造形的な視点を豊かにするために必要な知識と、表現における創造的に表す技能に関する目標、（２）は、表現における発想や構想と、鑑賞における見方や感じ方などに関する目標、（３）は学習に主体的に取り組む態度や美術を愛好する心情、豊かな感性や情操などに関する目標について示しているものである。

また、美術科で目指す資質・能力の育成について、目標で示されている（１）、（２）、（３）が相互に関連し合い、一体となって働くことが重要だとしている。

これらのことから、本年度美術科では、研究主題を「美術の資質・能力を育む授業の工夫」とし、そのために、教科の目標で示された（１）、（２）、（３）を相互に関連付けた授業を行う。

その中で本年度（平成31年度）は、「造形的な見方・考え方を働かせた学び」を通して育まれた資質・能力の評価方法をさらに整理するとともに、学年間や教科間の学びのつながりに焦点を当て、継続的、そして横断的な教育課程の編成に取り組む。このとき、以下のことを踏まえて研究を深めていくこととする。

（１）学習指導要領における、美術で育成する資質・能力の整理

①教科の目標と資質能力の関連について

次の表1は、表題の件について表したものである（「平成29年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」p.17より抜粋）。この表を基に、これまでの学習のねらいや評価について、新学習指導要領によるものとの対応や整合性を検討しながら取り組んでいくこととする。

表1 教科の目標と資質・能力の関連

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。		
知識及び技能	(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、（〔共通事項〕）	表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。（創造的に表現する技能）
思考力、判断力、表現力等	(2)造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、（発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力）	美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。（鑑賞に関する資質・能力）
	主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、（発想や構想に関する資質・能力）	
学びに向かう力、人間性等	(3)美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。（全ての指導項目）	

②「知識」について

生徒が「知識」を身に付けたかどうかについて、具体的に二つの学びの様子から確認することができる。一つ目は「知識」を言語化することで、もう一つは「知識」を活用することである。一つ目の言語化することについては、授業中の教師の発問に対する解答や発言、ワークシートにおける記述などで評価することができる。一方で、活用することについては、活動の中で試行錯誤しながら繰り返し「知識」を用いることである。制作における気付きや、授業や題材のまとめの際に大切だと思ったことのように振り返ること、評価できるものである。これは、「技能」にもつながっていくと考える。

本校美術科ではこれまでも、目標や目指す力を明確にするとともに、生徒にわかりやすく伝えることも大切にしてきた。その中で、今後は「知識」とはどんな力であるかを生徒に伝えるか、ということについても検討を行っていきたい。

(2) 授業づくりの要素

前述したように、授業づくりにおいて第一に重要であるのは、その授業や題材におけるねらいは何かを明確にし、生徒もそれを理解して授業に臨むことである。このことを踏まえ、ここではこれまでの研究で明らかになってきた三つの要素について確認する。

まず一つ目は問いを持つことができる題材である。生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで、生徒自身が問いをもち、その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。

二つ目は題材の導入である。ねらいを理解し、見通しをもって取り組むことができるように、ねらいや授業計画について、ポイントを絞って伝えることが重要である。

三つ目はワークシートと、生徒への働きかけである。「『知識』について」でも述べたとおり、「知識」を言語化することや活用することのために、何を記述すればよいのかわかりやすいワークシートや、制作の中での気づきを「知識」と結びつけることができるような教師の働きかけが重要である。このことから、その時々生徒の学びに適切な働きかけができるよう、より生徒の姿を思い浮かべ、反応を予想しながら題材計画を検討していくことが大切だと考える。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことをとおして、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度を養う。そして、学びの過程において育成される資質・能力を明らかにする。

3. 研究の内容

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。<ul style="list-style-type: none">・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発② 美術科の目標で示された(1)、(2)、(3)の関連を明確にした授業計画を立てる。<ul style="list-style-type: none">・ねらいや学習内容などが整理できる、言語活動やワークシートの工夫・PDCA サイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり③ 「知識」の適切な位置づけによる題材設定や授業の展開を工夫する。 |
|---|

4. 3か年の研究の見通し

1年目である平成29年度は、造形的な「見方・考え方を働かせた学び」がどのような授業か具体的な姿を明らかにすることに焦点を当て、授業の構造化を目指した。さらに、授業をよりよくするための手立てに着目し、要素を明らかにすることに取り組んだ。

2年目である平成30年度は、造形的な「見方・考え方を働かせた学び」を通して、育成した資質・能力を見取る評価方法を明らかにすることに焦点を当てた。特に授業構成とワークシートに注目し、形成的評価や総括的評価の活用とともに、生徒自身が見通しと振り返りができるような工夫について実践を重ねた。

3年目は、1、2年次の実践を基に、さらに評価方法を整理するとともに、継続して取り組めるような教育課程編成の工夫について検討していく。

さらに、3か年研究をとおして、美術の資質・能力を育むための授業づくりの要素をまとめた。

5. 参考文献

- 教育課程部会教育課程企画特別部会（2016）「各教科等別ワーキンググループ等の議論の取りまとめについて」
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2011）「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 美術）」
- 永関和雄・安藤聖子編著（2018）「平成 29 年度改訂 中学校教育課程実践講座 美術」
- 福本謹一・村上尚徳編著（2017）「平成 29 年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」
- 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説 美術編」
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 総則編」
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 美術編」
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校（2015）「平成 26 年度 研究紀要」
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校（2016）「平成 27 年度 研究紀要」
- 山梨大学教育学部附属中学校（2017）「平成 28 年度 研究紀要」
- 山梨大学教育学部附属中学校（2018）「平成 29 年度 研究紀要」
- 山梨大学教育学部附属中学校（2019）「平成 30 年度 研究紀要」